

書 評

高岡熊雄著 『北支移民の研究』
上原轍三郎著

(日本學術振興會 第二及第十四特
別委員會報告、東亞經濟研究(1))

阿 部 源 一

北支からの滿洲移民の問題は、色々の觀點から考察することの出来る興味深い問題であるが、現下の東亞共榮圈建設といふ觀點からすれば、少くとも次の二點が最も重要な意義を有する問題であらう。即ちその一つは北支農村の過剰人口の捌口としてであり、他の一つは滿洲の物的資源開發のための人的資源としてである。第一の問題については、私は幾つかの論文に於て支那農業の基本的難關は農村の人口過剰に在ることを論じ、支那農村の階級構成を分析する前に、巨大な支那の人口が農村に

とちこめられて捌口を與へられなかつたことに注目すべきことを強調した。あれほどまでに農村人口の密度が高くては、農村機構を如何に改革して見ても、生活程度を向上せしめることは覺束ない。支那の都會の工業が農村人口を吸収する程に發達することは急速には望み難い。又、カナダや瀋洲の如き太平洋沿岸の人口稀薄にして大面積を有する國々が支那移民を許さない。そして支那農民を救ふ道は産兒制限より外にないといふ結論を出してゐる有様である。全く支那農民の生くべき道は前途暗澹たるものであつた。この暗澹たる前途に一縷の光明を與へたのが滿洲への移民と南方諸地域への移民即ち華僑である。然るも南方への移民の數よりも滿洲への移民の數の方が遙に多數なのである。日本の滿洲開發は、北支農村の過剰人口に捌口を與へたものであつて東亞共榮圈建設に重大な役割を演じつつあつた譯である。北支農村の中でも特に人口密度の高い山東、河北の農村が滿洲への出稼によつてどれだけ助かつてゐたことか。匪賊化するより外に生きる道のない之等の農民に生業によつて

生きるべき道を與へ、北支の治安維持に大なる貢獻をなしてゐたと言ふことが出来る。

第二の問題は人的資源としての滿洲移民であるが、支那農村の過剰人口は觀方を變へれば、巨大なる人的資源に惠まれてゐることになる。物も人も過剰と考へられた不況時代から一轉して、物も人も不足を告げるに到つた戰時經濟に入つてからは、

支那農村人口は巨大なる人的資源の貯水池の役割を演ずる事になつた。東亞共榮圈建設に當つて資源問題が最も多く論ぜられたが、その多くは物的資源論であつた。埋藏量が幾らあるとか年生産量が幾らであつたとかいふ商品學的數字の羅列が多かつた。併し、單なる物的資源は眠れる資源であつて餘り意味がない。之を開發し運搬し製造して初めて生きて來る譯である。ところで眠れる資源を活かす第一歩は苦力の肉體力である。この

最も原始的な基本的な肉體力こそは、東亞諸地域に眠れる資源の開發にとつて最も根本的な問題である。これなくしては如何に巨大なる物的資源も活用し得ない。低い生活程度を意に介せず、困苦缺乏に平氣で堪へる支那農民こそは、東亞開發のための巨大なる人的資源である。滿洲の鐵道、道路、鑛山、發電所、製鍊所、工場、農場等々總て苦力の肉體力を基礎として建設さ

れたものである。日本の技術と資本に北支農民の肉體力が結びついて建設されたものである。この建設形式は、北支にも中支にも南支にも南方諸地域にも漸次に廣まるものと考えられる。

滿洲への移民問題は單なる經濟問題ではなく、其他に人種民族の問題、衛生、風教等の問題が多々潜んでゐるが、いま單に經濟問題に局限して觀察しても以上の如き重大な意義が存してゐる。この根深い問題に對して日本學術振興會は研究のメスを入れ、東亞經濟研究第二編北支移民の研究として發表されるに到つたことは慶賀に堪へない。

二

本研究は日本學術振興會の第二(舊)及第十四特別委員會の研究成果である。委員長は神戸正雄博士であり、本研究をまとめられたのは高田、上原兩委員である。

本研究は大別して二編に分ち、第一編は「北支那に於ける北支移民」と題し、移民を出す北支那の側より見たる研究であり、第二編は「滿洲國に於ける北支移民」と題し、移民を入れる滿洲國の側より見たる研究である。第一編に於ては、北支移出民の沿革に一瞥を與へ、次いで北支移出民の實態を丹念に分析し、

更に北支移出民の原因を自然的、社會的、經濟的、政治的諸原因に分つて觀察して居る。而して北支移出民が北支の社會及經濟に與へる影響を分析して居る。最後に北支移出民の對策を考察し、統一的北支移民機關設立の必要を強調して居る。

第二編に於ては、滿洲國に於ける北支移民の沿革並に各種民族間に於ける地位を分析し、次いで滿洲國に於ける北支移民の實態を詳細綿密に分析し、滿洲國に於ける北支移民の誘因を自然的、經濟的、社會的、政治的及び其他の特殊的誘因に分つて考察して居る。更に滿洲國に於ける北支移民の特質を經濟上、社會上、政治上より究明し、最後に移入民對策に論及して居る。

資料は主として滿鐵其他の日本の調査機關の作成せる調査資料を利用して居る。外國人の書いたものを變直しするのではなく、日本人の行へる斷片的調査を系統的に組織的に活用せる點は、東亞經濟研究者にとつて如何にして東亞經濟を研究すべきかを教へる好模範を示して居る。日滿支に於ては、滿洲、支那に關する調査資料は相當豊富にあるが、之等を學問的に構成して或る立論をなすといふ研究に缺けて居つたのであるが、本書によつてその缺が補はれた。問題の扱ひ方は、理論的であると同時に飽くまでも著實な實證的研究である。統計と圖表を澤山

に利用して、手に取つて見せるが如く、或は又痒い所に手の届く様な研究である。従つて統計表百四十三、圖表四十三といふ多數に上つて居る。

この著實な實證的研究によつて、觀念的な東亞共榮圈建設論者や東亞協同體論者は反省させられるであらう。例へば、北支農民は農閑期に滿洲へ出稼ぎに出て金をためて、農繁期には北支へ歸つて農耕に従事するとしたならば大變好都合であるから、觀念論的にはついでにこゝろいふ希望的觀察をし易いのである。併し調査によると、冬の間は滿洲の産業も冬眠状態に入るので北支移民をそれほど必要としない。一陽來復して北支の農業が多忙になる頃には、滿洲の産業も活動を開始し、勞働力に對する需要は急激に増大する。滿洲と北支とは自然的環境が類似してゐるので、産業の活動時期や勞働需要の時期等は一致することが多い。従つて將來、滿洲にも北支にも産業が興り勞働力を必要とすることが多くなれば、滿洲と北支との間には有無相通の關係ではなく相剋の關係が生ずる恐れがある。

三

本研究は流石に斯學の耆宿の老練なる手に成れるだけあつて

隙のない研究であるが、二、三の注文を付けて置きたい。その第一の點は本研究は、政策樹立のために役立つべく現状分析に主力が注がれてあるが、歴史的研究がもう少し欲しかった様に思ふ。それも極めて古い時代に溯るのではなく、北支からの滿洲移民が年々數十萬の多數に上り出した日露戦争以後の過去四十年間の移民史をもう少し詳しく描いて欲しかったと思ふ。と同時に、滿洲國內の各種産業に於ける漢民族と朝鮮人、日本人との競争力の分析と將來の見透しも、もう少し詳細に説いてもらひたかつたと思ふ。

第二の點は、本研究は北支移民の經濟的側面は餘蘊なきまでに説かれてあるが、近代の合理主義的經濟生活以前の北支農民の移出現象を合理主義的經濟觀のみから眺めては真相に觸れない點があるのではないかといふことである。即ち滿洲は北支に比して農作物に對する天災は少いし、又人口稀薄なるために勞賃は高く、生活費は低廉であるといふのであれば、北支から永住的に入滿する者かもつと多かるべき筈であるに拘らず、依然として渡り鳥の如く春來て冬歸る者が多いのである。あの人口過剰の山東、河北の農村のどこに魅力があるのか知らないが、とにかくこの故郷に永別する者が少いのである。恐らく支那農

村の家族制度の根強さ等も影響してゐるのであらう。ジャバも支那の江蘇省と同程度に農村人口密度が極めて高いが、それでもなほ人口稀薄なスマトラ等の外領へ移住する者が少く、依然として故郷の農村にウヨ／＼してゐるとのことである。斯る心理状態は合理主義的經濟觀では割切れないものがある。未開社會を考察するにはこゝろいふ非合理主義的要素に強く注目しつつ分析する必要があると思ふ。

併し以上の如き注文は、強いて隙を見つけて書いたものであつて、本研究の本筋には毫も影響がない。要するに本研究は、稍々政策資料の色彩は強いが、理論と實證とが緊密に結びついた隙のない研究である。本問題に關しては、世界的水準に達してゐると言つてよいであらう。ワグナーやバックやトイーやマジヤール等の支那農業經濟論に比して決して見劣りするものではない。この水準の東亞經濟研究書が相次いで完成されるならば、日本の東亞經濟研究も世界的に濶歩し得る譯である。

(有斐閣發行、定價四圓二十錢)